

人間は地球上のあらゆる環境条件の地に移動し、分布し、生活してきた。過去から現在までの人間の移動の本質を見極めようとする「人類の移動誌」は、移動する動物としての人間の姿を多様な視点から描き出した（印東編 2013）。初期人類の誕生と拡散の足跡をたどる意味では、アフリカからアジアにかけて連続性を持つ乾燥熱帯沿岸域と呼べる社会生態系が「安定的な避難地」であり「生物地理学的な回廊」であった可能性が注目される（縄田 2013a）。また沙漠・乾燥地とりわけアフロ・ユーラシア内陸乾燥地は、文明の形成地であり、人間生活の基本構造の分析からは新たな人類文明史観を展望できる（嶋田 2012）。アフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略の解明は、初期人類の拡散、乾燥地への適応、文明の形成といった観点から意義深いことと考える。

ただし、干ばつの頻発や土壌侵食といった自然環境全般の変化、石油といった新たな地下資源の発見に伴う土地所有概念の変化、水資源開発技術の発展とその分配・運搬方法の革新等、ここ 100 年程の間に起った急激な社会変容によって、現地住民の生活様式に大変化がもたらされた。

その変化を具体的かつ包括的に検証するために、アフロ・ユーラシア沙漠社会において実証的な研究を精力的に継続してきた研究者によるグループを組織して、本共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」を開始した。

## オアシスの持続と変容に、どう迫っていくか

沙漠社会の移動戦略の比較研究を推進していく上でまず注目したいのは、地理的空間としてのオアシスである。

オアシスは、沙漠の中にある淡水と植生とが恒常的に見られる場所であり、交易活動の拠点としての役割を果たしてきた。沙漠の歴史と文化は、オアシス都市の興亡と交易路の盛衰と密接な関係を持つことが知られている。

本共同研究では、アフロ・ユーラシア乾燥地全域を対象としつつも、とりわけサハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、アラビア半島、イランに位置する 5 つの異なるオアシスにおける生活の持続と変容について検証する。

これらの 5 つのオアシスに注目する最大の理由とは、およそ半世紀前に日本と中東の地理学者・人類学者・農学者が実施した現地収集資料（写真・地図を含む）が残っている点にある。これらの資料を、現代の土地利用、生業形態、水管理と対照・

比較することにより、グローバル化を含むこの 50 年という時間幅で生活空間の変動を個別に追っていくことが可能となる。

具体的には 1) 地理学者の小堀巖（1924-2010）によるアルジェリア・サハラ沙漠のイン・ベルベル・オアシスにおける現地調査資料（1968～2010）（小堀 1996; 縄田 2013b）、2) 文化人類学者／地理学者の片倉もところ（1937-2013）によるアラビア半島サウディ・アラビアのワーディ・ファーティマ・オアシスにおける現地調査資料（1968～2008）（Katakura 1977; 片倉 1979）、3) 地理学者／農村社会学者の大野盛雄（1925-2001）とその研究継承グループによるイラン・マルヴダシュト地方における現地調査資料（1966～2013）（大野 1971; 後藤編 2015）であり、それらの整理と再検証に本共同研究の参加メンバーが関わっていることの強みを活かしていきたい。

## 半世紀前の実証的研究データを活用する

たとえば片倉は、アラビア半島のワーディ・ファーティマ・オアシスの 1960 年代末時点における父系、母系、婚姻関係という社会紐帯について、また 1950～70 年代の村への人びとの出入りを具体的に記載している。あわせて、用水量、家畜数、農地面積、農耕歴、食生活等を示しつつ、家計の支出、市場の物価を一覧表にすると同時に、井戸の維持管理や農作業を担う農業労働者と土地所有者の関係についてモノシオグラムとして示している。くわえてワーディ（枯れ谷）沿いの耕作地と用水形態が詳細に記述され、住居域や家屋タイプについても地図に落とし込まれている。テントの構造、家屋のタイプ、室内の家具・台所用品等のスケッチといった物質文化の記録も豊富である（Katakura 1977）。

衛星画像の分析や社会調査の手法を用いてこれらの資料を再検証すれば、中東地域においてドラスティックな現象として観察される生活様式や資源利用形態の「世代間ギャップ」

に具体的に迫ることもできると考えられる。

筆者は 2015 年 3 月にワーディ・ファーティマ・オアシスを訪れ、生活や農地の現状を観察し、当時のインフォーマントや関係者にコンタクトをとり、同地での継続調査が可能なことを確認した。とくに注目したのは、現地の行政組織であるジウムム社会開発センターに収集・保管されている数百点に及ぶ物質文化コレクションである。

筆者は、この資料を地域住民との共同作業によって将来世代



ナツメヤシとハト小屋がある沙漠のオアシス（2015 年 3 月、サウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマ、縄田浩志撮影）。

のために研究し、物質文化を中心とした民族学的・文化人類学的学術資料の現代的活用の道を切り拓くことができるのでは、という展望を得ることができた。そのことが、本共同研究の主な研究対象を、物質文化に絞った1つの大きな理由でもある。

### 物質文化から、移動戦略をどう浮き彫りにできるか

それでは、物質文化から移動戦略をどう浮き彫りにすることができるのだろうか。

注目する物質文化は、①ラクダと船に関わるモノ（陸域と海域の連続性）、②飲料と食料に関わるモノ（食品保存と運搬性）、③衣装と住居に関わるモノ（熱帯と温帯・寒帯の対称性）である。これらの物質文化の検討をもとに、人間の拡散と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの観点から沙漠社会の移動戦略を解明することができないかと考えている。

一例として、海上の移動手段である船からは何がわかるか、とくに沙漠・乾燥地で発達してきた船のどのような特徴に注目すればよいのか、第1回研究会での中村亮（国立民族学博物館）による発表と議論をもとに、示してみたい。

陸上資源が乏しい乾燥地において、船は食料・建材・燃料等の重要な沿岸資源にアクセスするための道具である。それには、伝統的な知識や技術が凝縮されている。中東の産油国では近年、鋼鉄や繊維強化プラスチック製のエンジン船が使用され、帆を使用した木造漁船は姿を消した（遠洋航海用の大型の木造船であるサンブーク、ジャハズィ、ブーム等はまだ存在する）。その意味で、アラビア湾で20世紀後半に使用されていた木造漁船は、民俗資料としての価値が高い。船材の木材分析から、木材が希少な乾燥地でどのような材をどこから入手していたかがわかる可能性もあり、乾燥地の生活の知恵や技術を知ることができる。また、船の構造を「インド洋海域世界」で比較研究することで、物質文化の視点から海上ネットワークを通じた民族や文化の交流史を再検証できる。

### 標本資料目録へのアクセス、そして実見へ

本共同研究の最初の研究会では、国立民族学博物館（以下、民博）の標本資料目録に登録されている「H0100191／漁船／アラブ首長国連邦／1982年」に注目してみた。

その理由は、民博外部から標本資料目録を閲覧した段階で、片倉により収集されたものと予測されたからである。片倉もとこ記念沙漠文化財団には漁船収集当時のアラブ首長国連邦のシャルジャの造船場での現場写真、購入経緯がわかる通関書類、その社会的背景に関する資料がいくつか残されている



サウディ・アラビアのジウムム社会開発センターに収集・保管されている物質文化コレクションについて職員から説明をうける（2015年3月、縄田浩志撮影）。



中東にて収集された標本資料を、民博の収蔵倉庫にて研究会参加メンバー全員で実見する（2016年10月、遠藤仁撮影）。

こともあり、研究資料の照会を計画した。

本共同研究開始に伴って、民博内部から標本資料目録の詳細にアクセスすることができ、まず片倉による収集品であることは明確となった。本人が日本語・アラビア語で記した原本の台帳も閲覧することができた。しかしながら非常に残念なことに、虫食い等により著しく劣化していたことから、漁船本体は2013年3月には廃棄処理がなされていた。ただし、廃棄前に撮影された写真、解体した際の観察等の資料調査記録を参照することができたため、詳細な計測データはないものの、船体の形状や特徴から20世紀後半アラビア湾にて使用されていた木造漁船としての学術的価値を確認できた。

このようにして本研究はまず、片倉が中東地域で収集した約200点の民博の所蔵品の実見を皮切りに、沙漠の物質文化に関わる研究資料の比較研究をしながら、議論を積み重ねることとした。地域的な専門性や多岐にわたる関心を踏

まえて、人文社会科学、理学、工学、農学という異なった視点から、1つのモノを実見することを通じて、アフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略についての新たな視点や論点を獲得することを目指していきたい。

### 【参考文献】

- 印東道子編 2013『人類の移動誌』臨川書店。
- 大野盛雄 1971『ベルシャの農村』東京大学出版会。
- 片倉もとこ 1979『アラビア・ノート—アラブの原像を求めて』日本放送出版協会。
- Katakura, Motoko 1977 *Bedouin Village: A Study of a Saudi Arabian People in Transition*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 後藤晃編 2015『オアシス社会50年の記録』御茶ノ水書房。
- 小堀巖 1996『乾燥地域の水利体系—カーナートの形成と展開』大明堂。
- 嶋田義仁 2012『砂漠と文明』岩波書店。
- 縄田浩志 2013a「イエローベルトとブルーベルトが出会うところ—初期人類による出アフリカ拡散の舞台として」佐藤洋一郎・谷口真人編『イエローベルトの環境史—サハラからシルクロードへ』pp. 168-189、弘文堂。
- 2013b「サハラ沙漠のオアシス、イン・ベルベル研究の回顧と展望」石山俊・縄田浩志編『アラブのなりわい生態系第2巻 ナツメヤシ』pp. 189-199、臨川書店。

### なわた ひろし

秋田大学大学院国際資源学研究所教授。専門は文化人類学、社会生態学、中東・アフリカ地域研究。主な著書に『砂漠誌—人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』（共編著 東海大学出版部 2014年）、『ナツメヤシ』『マングローブ』『外来植物メスキート』『サンゴ礁』『ジュゴン』（いずれも共編著 臨川書店 2013~2014年）等。